

中国四川省大地震 パンダタオルプロジェクト

第3回現地報告会



[日時] 4月27日（月）19：00～21：00

[場所] 名古屋大学環境総合館 4階 地域防災交流ホール

[主催] 特定非営利活動法人レスキューストックヤード

[共催] 財団法人名古屋国際センター、CODE海外災害援助市民センター
日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）

中国四川大震災パンダタオルプロジェクト 第3回現地報告会

[これまでの経緯と趣旨]

2008年5月12日に発生した中国四川大地震を受け、RSYでは6月16日、名古屋国際センターにて「現地報告と今後の支援を考える会」を開催しました。この企画については、多くの賛同団体のご協力を得ることができ、当日も100名を越す参加者が集まりました。その後、有志で作業部会を立ち上げ、現在までに十数回の話し合いや作業を重ねました。その結果、「被災地を忘れない・思いを馳せる・気持ちを届ける」をキーワードに、日中友好のシンボルであるパンダを象った手拭タオル「パンダタオル」とメッセージカードを作成し、被災地に送る活動を決めました。この企画を「中国四川大地震パンダタオルプロジェクト」とし、10月から現在まで、聾学校や国際交流に関わるイベント、当方主催のパンダタオル手作り教室等、いくつかの場所でパンダ作りを行っています。

11月6日～11日には、中国四川省への被災地視察調査に参加することとなり、皆さんの心のこもった「パンダタオル」を現地へお届けするチャンスを頂きました。震災からもうすぐ1年が経とうとしていますが、メディアからも地震についての話題はほとんど取り上げられることがなくなりました。昨年11月に行った第2回現地報告会では参加者約40名であり、既に「被災地の風化」が大きな課題となっていると感じました。

そんな中、震災当初から瓦礫の撤去を行い、現在は地域全体の復興支援を継続しているCODE海外災害援助市民センターは、活動中に会った住民の方が「私たちに関心をもってくれてありがとう」と何度もお礼を言われたことが印象的であったと報告しています。長期に渡る被災地復興を支えているのは、日本での災害の時と同じように『相手の心に寄り添う気持ち』であると改めて感じます。

これまで多くの方がパンダタオルを通じて繋がり、被災地へ想いを馳せ、また自分の住む地域の防災対策についても感心を寄せ始めました。被災地からの学びや関わる方々の想いを四川の皆さんに必ず届けることを目標にし、国際協力について、被災地の復興支援について、活動を通じたネットワークづくりについて、それぞれのあり方を「パンダタオル」をきっかけに多くの方々と考えていきたいと思います。

[内容] 1) 趣旨説明

2) 基調報告

吉椿雅道さん（CODE海外災害援助市民センタースタッフ）

3) パネルディスカッションと意見交換

○パネリスト

椿佳代さん（RSYパンダプロジェクトボランティアスタッフ）

箕輪幸徳さん（V-MAXディレクター）

吉椿雅道さん（CODE海外災害援助市民センタースタッフ）

○アドバイザー

渥美公秀さん（日本災害救援ボランティアネットワークNVNAD代表）

○コーディネーター

栗田暢之（RSY代表理事）

【被災地の現状と今後の課題／吉椿雅道さん（CODE
海外災害援助市民センタースタッフ）】

■被災地の現状

□四川大地震の概要（8月4日 中国国务院 発表）

2008年5月12日 14時28分（現地時間）

マグニチュード M8.0

被災地 成都から東北へ約300K周囲

被災者 約4624万人

死者 6万9207人（2万4700人）

負傷者 37万4468人

行方不明 1万8194人

□概要

倒壊家屋 約21万6千棟（94万200棟）

損壊家屋 約415棟

学校校舎 7000棟弱 倒壊

経済損失 約13兆円（81兆円）

・5月12日地震3日後の15日に四川省へ入った。四川省の面積は日本の1.3倍、成都是震源地。成都には活断層、約300キロ（神戸から広島間）のものがあ、ひとつの国のような場所が被害にあった。産業は農業や観光業。

・町一つが崩壊しているところがあり、多くの方が埋まっている状態で、救出しようがない。そのため死者、行方不明など合わせると約9万人が亡くなっている。以前はよく報道されていた学校は7000棟弱が崩壊している。

□北川県域

・県庁所在地で通常約3万人いる人口が1万2千人になった。瓦礫の山は6階、7階建ての建物だった。下のほうにいる人は救出できないため、行方不明者が多い。地震直後で救命活動をしているが、安置する場所がないため、ご遺体がたぐさある。

・9月に集中豪雨があり、土石流が流れた。倒壊した町の半分が埋まっている。今後は遺跡の博物館が決定している。

□農村部

・一戸建ての建物は倒壊。農地の被害がある。水がかれたりしている。

・5月は田植えの時期で、自宅が崩壊していても田植えを優先させて、掘っ立て小屋やテントを作って生活をしていた。

□都江堰

・有名な観光地はビルが傾いたりしている。今は撤去されていて、地震が起きたことがあまり分からない状態になってきていた。

□避難所（綿陽市）

・一番大きい避難所で、直後は3万人の人がいた。雨をしのぐ程度のつくり。雨が降ると寒くなる。学校や病院、役場などは倒壊してるため避難する場所がなかった。

□テント村（地震から少し経って）

・政府からブルーテントが配られ、約1万人が生活をしていた。

□都江堰の仮設住宅

・6月ごろから仮設住宅が建設された。外観は日本と同じようだが中には売店、トイレがある。8月には蚊帳をかったり、家財道具を入れたり、フローリングを変えたり、いろいろと工夫がみられ、11月には床屋やDVDレンタル屋も営業していた。

□住宅再建

・日本と比べるととても早い。ほとんどがレンガ住宅。倒壊した建物もレンガ住宅だったと考えると、耐震構造がしっかりされていない。中には鉄筋を入れたり、瓦屋根を軽くする工夫をしているものもあるが、耐震構造的には弱い。同じ規模の地震が起きると、倒壊する可能性がある。

□伝統住宅

・CODEが関わっている村では、軸組み構造で、くぎ

を一本も使っていない伝統工法がすすめられている。伝統住宅は、今回の地震でも骨組みが残っていて、倒壊をまぬがれたものが多かった。四川大学の先生と協力して再建した。

■CODE が活動に入っている光泉郷光明村の地震後の状況

・約 700 人の少数民族の村。農業が主で自給自足の生活。若い人は出稼ぎに行っており、ほとんどが高齢者と子どもである。子どもたちが学校に通っていた時間帯に地震があったため、光泉郷全体では、60 人の子どもが亡くなった。またその他の人は、田植えをしたり、畑に行ったりしている時間帯であったため、人的被害は少なく納まっている。

□CODE の復興に対する活動

「瓦礫の片付け」

・こびりついたセメントを落とす・仮設住宅の建設の手伝い・農作業の手伝い
・ボランティアが村に入り、活動を続けることによって、活動先の被災者のお母さんがご飯をつくってくれるようになる。またみんなで一緒に食べることによりお母さんや村の人たちが少しずつ元気になっていった。

「被災者の声（通称つぶやき）、ヒヤリング」

・数千人のヒヤリングを行い、日本に発信している。またニュースで流したり、今後の復興のために役立っている。

「つぶやきからの紹介」

・地震の 1 年前に建てた 4 階建ての建物を持つお医者さん。息子さんがお医者さんの安否を喜んだら、命よりも家が大事だといった。
・岩手・宮城内陸地震が起きたときに、お母さんは日本にボランティアへ行こうかと何度も電話をしてきてくれた。

「伝える」

・地域住民と自宅再建のための勉強会を開催した。次の災害に備えた耐震建築の重要性を説明した。

「力を合わせる」

・伝統住宅の再建において、昔からのコミュニティーがあり、村のみんなで分担し作業を行った。

■1 年ともにしてできた信頼と絆

・「愛をささげる心は、尊く温かいものである。ボランティア精神は永遠に続いていく。すべてのボランティアの方へ」と書いてある感謝の旗を頂いた。

・元気づけのためのイベントとして、「コンサート」が開催された。CODE と繋がっていた日本の華僑の方に同行してもらい一緒にコンサートを行った。芝居や、歌、子どもたちの踊りの披露など、お互いの交流の中で、村の人たちは元気になっていった。

■CODE の今後の活動

・光明村のある北川県香泉郷全体の診療所を含む「総合活動センター」を 7 つの村にひとつずつ再建する。
・国家プロジェクト「新農村建設」の一環としてこの震災復興の中にも反映させている。

・総合活動センターは、診療所・村民委員会・村内放送室・文化活動室などの機能も併設する。

・被災者自らが、自分たちの村や、地域を考えていくような村のコミュニティースペースとなることを願っている。

□キーワード

「地域医療と福祉」

・総合活動センターに中庭を作る予定。高齢者の方が、ここで気分転換をしていただけたらという願いから。役場と診療所は一緒に建物の中に作り、みんなで一緒に村の再建のことを考えることができるようにした。

「身土不二、医食同源（薬食一如）」

・「体と土はひとつにあらず」という言葉があるように、中国は農村が豊かである。家畜を飼っているため、有機肥料を利用している。自分たちでつくるものには農薬を使っていない。日本も学んでいかなければならない。食べものがよかったら、薬は飲まなくてもいい。また薬草を利用している。

「コミュニティ（地域）再生」

・農村部には仕事がない。現金収入が必要で、出稼ぎがとて多いところ。住宅再建で、何万円という借金を背負っている。

・竹の利用、有機野菜づくり、刺繍を使った地域おこしなど。社会企業化がウサギの養殖をし、貧困対策もしている。

「ああでもない、こうでもない」

・みんなで一緒に考えていく場を提供したい。

□現在の被災地における課題

復興格差

都市部の住宅建設の困難さ

住宅再建後の生業

大規模移転に伴う痛み

長期化する復興事業



（ 3 月中国に菜の花が咲き、復興の兆しが見えていると最後に言葉を添えられた、吉椿雅道さん ）

【パンダタオルプロジェクトの活動状況／椿佳代さん（RSYパンダプロジェクトボランティアスタッフ）】

■パンダタオルプロジェクトの概要説明

□目的

- ・「被災地を忘れない」「困った時はお互い様！」
- ・パンダタオルを通じた被災地との心の交流
- ・国際協力、災害救援・被災地支援に関わるボランティア活動の場の提供

6月16日に現地報告会をしたあとに、作業部会をつくるため参加を呼びかけ、パンダタオルプロジェクトがスタートする。私は作業部会立ち上げ後、関わることになる。

□活動内容

- ・作業部会実施
- ・現地活動報告会実施
- ・パンダタオル手づくり教室の開催
- ・イベント等でのブース出典
- ・募金の呼びかけ
- ・「パンダ通信」の発行

□パンダタオルのしくみ

→別紙「パンダタオルプロジェクトのしくみ」参照

■この活動を行ってよかった点

- ・防災以外の人とのつながりができた。
- ・四川省のことを知ってもらう機会になったり、日本には地震が多い国ということも分かってもらえた。
- ・世間話の中で、普段から気をつけておくことなど、防災に関心をもってもらうこともできた。
- ・市民レベルでの災害による関心をもってもらい、自分たちも何かできるという気持ちをもってもらえた。
- ・パンダタオルをつくる場で、お互いに教えあうことによって仲間づくりもできたと感じる

■パンダタオルプロジェクトのこれから

- ・資金確保（運送代、スタッフの渡航費、経費など）
- ・助成金の申請や賛同団体の呼びかけ
- ・パンダ通信を中国語に翻訳して、パンダタオルと一

緒に持っていったらと考える。

- ・日本と中国の子どもたちとの交流会と学びあう機会をつくりたい。
- ・最初はパンダタオルを届けることができたらいいね～から、パンダタオルが子どもたちのおもちゃとして、すごく喜んでもらえていることを知り、子どもが喜べば、親も喜んでくれている、多くのパンダを作りたいと思う気持ちが強い。輸送の問題はいろいろとあるが、つくるときにはご協力をお願いしたい。



(パンダタオルプロジェクトの展示物)

【11月に届けたパンダタオルのその後について、静岡県のケーブルテレビ番組制作のために、現地追跡取材を行った際のご報告／箕輪幸徳さん（V-MAXディレクター）】

・昨年6月に北京に住む女性ジャーナリストが、都江堰などの取材をし、日本で僕が編集してオンエアをした。自分自身も取材をしたかったというのが、今回の経緯。

■大陸に渡ったパンダ

- ・3月31日～4月2日までの取材で、成都へ向かった。
- ・現地の公安が厳しいということで、小さいカメラ1つで現地へ向かう。
- ・11月の訪問時に、RSYスタッフがパンダタオルを渡した方々のその後の暮らしを追い、追跡取材をかねて四川の現状を伝える番組を作った。

■パンダタオルを見せて頂く機会を得た

・棚花村で伝統の刺繍を作っている女性、鐘 思琪（チヨン スーチー）さんに会うことができた。部屋に案内してもらって目に入ったのは、「まけないぞう」のタオルだった。パンダタオルは奥の方から大事に出してきてくれた。かわいくて使えないと。

「刺繍について」

・今現在、女性の方が集まって来ていて、一緒に刺繍をつくっている。この女性たちの中には、地震で子どもを亡くされた方もいる。

「地震について」

・建物は崩壊し、「死ぬかと思った」とスーチーさんの口から辛い地震の思いを語ってくれた。その時の写真もを見せてくれた。

「震くんに会えたのか？」

・震くんとは、RSYが現地で最初にパンダタオルを手渡した赤ちゃんで、地震発生当日の5月12日に生まれた男の子。地震にあやかって「震くんと名づけられた。震くんはスーチーさんの家の近所に住んでいるが、2、3日親戚の家に行っていて、会うことができなかった。親戚の方から、いつもパンダタオルを持ち歩いているという話を伺うことができた。

■箕輪さんからのメッセージ

・パンダタオルの追跡取材をして、被災者からの話を聞き、パンダタオルが子どもたちに元気を与えている。子どもたちや現地の人たちに会うことにより、改めてこの活動が少しずつ形になっていっていると感じた。

・「ボランティアがどんどん四川から離れていく中、パンダタオルはとてもうれしい！！」「ありがとう」とスーチーさん。多くの方が四川のことを忘れていってしまうという現実がある中、パンダタオルは、一番大切な「心」と「心」が通うものだと感じた。

取材後日本に帰国してから、スーチーさんからパンダタオルを握りしめている震くんの写真が送られてきた。



(スーチャーさんから送られてきた震くんの写真映像)

【栗田暢之 (RSY代表理事)】

報告会の第1回目は、地震が起きてからすぐだったこともあり、100人近い人の参加であったが、第2回目は約40名と減っていった。しかし、作業部会はボランティアのTさんやAさんに助けられて多くのパンダタオルができています。

人と人との思いがすべてだと感じる。人間が元気になっていくことの勇気づけの象徴としてパンダタオルがあるのでは。

復興とは都市化計画、観光という国の復興支援などいろいろあるが、レスキューとしての思いは、目の前にいる人、一人ひとりに思いを届けたい。多くのパンダを現地へ持っていく方法をこれから考え、第4回目の報告会に繋げて行きたい。

【渥美公秀さん (日本災害救援ボランティアネットワーク NVNAD 理事長)】

5月、7月、10月と現地へ行かせていただいている。報告会は第5、第6回と続いていくことと思うので、報告会が行われるその時々で、何ができるのかをこれから考えていきたいと思う。

□吉椿さんの話を聞いて

- ・被災地のお母さんがボランティアのために料理を作

くることで、お母さんが元気になる。また被災者の方からボランティアをしに日本へ行こうかという言葉が出てくる。これは支援する側、される側という立場が変わるとい関係ができあがっている。目の高さを同じにして、住民の方と同じ方向を向いている。コンサートは被災地を盛り上げるためにとてもよい取り組み。1年目はみんな頑張れる。しかし、2年、3年目からは、疲れや不安で頑張ることが難しくなる。またなかなか結果が見えない停滞の時期にもさしかかり、どのように乗り越えていくか、次のステップが課題であり、大切になってくる。



(左 箕輪幸徳さん、右 渥美公秀さん)

□椿さんの話を聞いて

- ・防災に関わっている人以外との関係ができるのは、すごい。
- ・中国へ持っていくことばかりではなく、日本での活動は何かないのか？気持ちを組み込んでの売るという意味で、お金を集める工夫はできないのか。届けるには税関などの問題もあるから。

□箕輪さんの話を聞いて

- ・パンダタオルが受け入れられている様子が映像ですごくよく分かった。
- ・震くんを通じて、中国の方と思いをつなげることができたらと思う。
- ・自分が中国に行くたびにいろいろ変化があると感じる。博物館ができていたり、洋風の建物ができてい

たりとびっくりするところがある。



(代表理事 栗田の終わりの挨拶)

【栗田暢之 (RSY代表理事)】

・第1回の報告会では、この活動はオリンピック後が勝負だと、渥美先生がおっしゃっていた。パンダタオルの大事なところは、「忘れていないよ、応援しているよ」と、言葉だけではなく、気持ちを伝えるメッセージであり、何年後も繋がっていること。

・財源の問題は大きいのか、今後日本と中国の子どもたちとの交流を通して、地震について考える時間をつくりたい。

・今日の話しを聞き、スーチャーさんが23歳だということもあり、大学生同士の交流を考えてもいいのかもと感じた。また名古屋大学、愛知淑徳大学、大阪大学などとリンクをして、第5回目の報告会には、今日ここにきている学生さんたちが中国にいけたらいいと思う。

・活動は出来る範囲でしか出来ないが、少しずつ活動を続けていきたい。さらなる皆様方のご協力をお願いしたいと思う。

START

パンダタオルプロジェクトの始まりはここから！

6

「被災地のみなさまへお届け」



1

「賛同者募集」

パンダタオルプロジェクトに賛同してくださった方にパンダキット1セットにつき、100円でご購入いただいています



2

「パンダキット」

キット準備はボランティアさんが行っています

タオルは過去の災害で全国から集められたものです



パンダキット一式「タオル／目・耳・鼻のフェルトパーツ／吊り下げ用sひも／首飾り用りボン／作り方の説明／メッセージカード」

パンダタオルプロジェクトのしくみ

NPO法人 レスキューストックヤード



キット準備もボランティアさんが行っています

4

「パンダタオル完成」！！



つくり手さんからのメッセージを翻訳ボランティアさんに中国語に訳してもらい、みなさんの気持ちもお届けします

5

「袋づめ作業」

被災地へパンダタオルを送るための準備をします



ボランティアリーダーの方がつくり方を教えています！！

3

「パンダタオル手づくり教室」

被災地の現状報告や写真展示なども行います

